

プルースト『失われた時を求めて』における
ゲルマント大公妃とアルベルチーナの変身と再生

—月と水をめぐって—

菊池博子*

The Metamorphosis and the Resurrection of Princess Guermentes
and Albertine in 《A la Recherche du Temps Perdu》 by Proust :

Concerning the Moon and Water

KIKUCHI Hiroko

abstract

In 《A la Recherche du Temps Perdu》 similar characteristics are observed between pairs of personalities. In the case of Princess Guermentes and Albertine, the common terms, kingfisher and peacock, have symbolic allusion: resurrection and metamorphosis. Princess Guermentes is a lady whom, together with her title, the narrator has a high regard for, while Albertine is his love.

Long after the death of Albertine, the narrator took the handwriting of another girlfriend of his for that of Albertine's and believes her to still be alive. Also, in a Carpaccio's painting he finds a coat resembling that of Albertine's. Princess Guermentes or her title is succeeded by a bourgeois Mrs. Verdurin. These are their resurrections and metamorphoses.

The narrator imagines when Bergotte, a writer, died that the latter is to resurrect in the form of his books. Proust himself had a fear about the future of his works, and yet had a doubt on the Christian belief of the Resurrection. All these feelings of Proust had been translated in the idea of "resurrection and metamorphosis"

Keywords : Marcel Proust, In Search of Lost Time, resurrection, metamorphosis, kingfisher

はじめに

マルセル・プルーストは、『失われた時を求めて』¹⁾の中で、登場人物たちの間にある種の関連性を与えている。タディエは、「異なる人物に同一の特徴を与えること」を例に挙げ、「裏切られた時に誇張した表現をする」スワン氏とシャルリュス男爵、「熟語の意味をよく知らない」ゲルマント公爵とコタール医師等、性格や行動の類似を指摘する²⁾。更に、それらの人々が連なる列に語り手自身が時々紛れ込む³⁾事実についても述べている。

本論では、ゲルマント大公妃とアルベルチーナの間に、「二人の人物の描写に同一の表現が使われている」例

キーワード: マルセル・プルースト, 失われた時を求めて, 再生, 変身, 翡翠

*平成17年度生 比較社会文化学専攻

を認める。ゲルマント大公妃は語り手が敬愛する貴婦人であり、アルベルチーナは語り手の恋人である。この二人の女性の描写に共通して使われる表現として、『alcyon, 鳥の翡翠（カワセミ）』⁴⁾及び「果物に喩えた月」がある。

タディエが挙げる例には恣意的なものもあるが、ゲルマント大公妃とアルベルチーナの組み合わせには、他の例にはない意図的な意味が与えられていると考えられる。二人に共通の表現の中「翡翠（カワセミ）」が後述の「孔雀」と共に暗示するものは、「変身」と「再生」である。この共通点は、もう一つの共通モチーフ「果物に喩えた月」にも連なってゆく。これらの共通点への語り手の介入についての分析を通し、小説の生成的な側面も考察する。

1. アルベルチーナの部屋着の「鳥」

第5篇「囚われの女」中に、語り手のパリの自宅に同棲しているアルベルチーナの部屋着に関する記述がある。16世紀のヴェネツィアの婦人服を復活させたことで知られる、当時実在のデザイナー、フォルチュニー作の部屋着である。部屋着の模様の「鳥」は「死と再生」を表すと述べられる。鳥の名は記されていない。部屋着の色は「青と金」である。

Ces robes de Fortuny, [...], dont Elstir nous avait annoncé la prochaine apparition, renaissant de leurs cendres somptueuses, car tout doit revenir, comme il est écrit aux voûtes de Saint-Marc, et comme le proclament, buvant aux urnes de marbre et de jaspé des chapiteaux byzantins, les oiseaux qui signifient à la fois la mort et la résurrection. (III, p.871)

あのフォルチュニーの部屋着、エルステールが、[...]、近い中に豪華な灰の中から蘇って又出現するだろうと予告した部屋着だった。というのは、ヴェネツィアのサン＝マルコ寺院の天井に描かれているように、又、ビザンティン式柱頭の大理石や碧玉の壺から水を飲む鳥たち、死と再生を同時に意味する鳥たちが高らかに告げているように、全ては戻ってくるものだから。(No.10, p.262) (エルステールは小説中の画家)

Pour les robes de Fortuny, nous nous étions enfin décidés pour une bleu et or doublée de rose, (III, p.895)

フォルチュニーの部屋着については、私たちは結局青と金のまざった生地でバラ色の裏地がついているものを選ぶことにして、(No.10, p.304)

小説中の鳥:孔雀《paon》、翡翠（カワセミ）《alcyon》、五色鸚（ゴシキヒワ）《chardonneret》、鳩、燕等の中、この部屋着の「鳥」は、「復活」を表すとされる「孔雀」と「翡翠」から考え出された鳥であろう。「孔雀」、「翡翠」は、シンボル事典には次のように記される⁵⁾。

「孔雀」: プリニウス（父）によれば、孔雀は秋に羽毛根を失い春に再びそれを得る。キリスト教では、肉体の復活のシンボルと認めた。聖杯の左右の二羽の孔雀は、生命の泉で水を飲む信者を表す。左右対称の二羽の孔雀は、不死鳥の代替となることが多い。

「翡翠」: 中世の自然理解では、毎年羽毛が新しく生えたとされ「復活」の象徴となる。

1-1. 翡翠《alcyon》の暗示

翡翠は生物学的な意味からは「水」に関連があるが、神話的な意味からは「月」との関連がある⁶⁾。「翡翠」と「月」との関係への言及は小説中には皆無であるが、ゲルマント大公妃もアルベルチーナも、その記述には、「翡翠」、「月」それぞれの暗示が見られる。

○翡翠の巢

第3篇「ゲルマントの方」中、ゲルマント大公妃が借り切っているオペラ座1階ボックス席《baignoir》が「浴槽」をも意味するところから「水」の縁語が使われていることは、定説である。この場面で水辺の鳥《alcyon》の喩えが、

大公妃の髪飾りの描写に使われる。

descendait du front de la princesse le long d'une de ses joues [...], et semblait l'enfermer à demi comme un œuf rose dans la douceur d'un nid d'alcyon [...], Sur la chevelure de la princesse, [...], et s'abaissant jusqu'à ses sourcils, s'étendait une résille (II, p.341)

「囚われの女」中には、眠るアルベルチーナの描写がある。

Ses sourcils arqués [...], entouraient les globes de ses paupières comme un doux nid d'alcyon. (III, p.580)

この《nid d'alcyon》という語は、1922年頃のものとしてされる第一タイプ原稿(NAF16742)中の、眠るアルベルチーナの描写の加筆部分に、ブルーストの手書き加筆の形で現れる。この記述は、第三篇「ゲルマントの方」中のオペラ座でのゲルマント大公妃の描写《dans la douceur d'un nid d'alcyon》と呼応させているものと思われる。このオペラ座の場面での《nid d'alcyon》という語は、1912年から1913年の執筆とされる「ゲルマントの方」の草稿原稿カイエ45(NAF16685)中にすでに現れている。

以上、ゲルマント大公妃の描写に現れる、《alcyon》、《ses sourcils》、《douceur / doux》が、アルベルチーナの描写にも使われていることが確認できる。

アリソン・ウィントンは、「眠るアルベルチーナ」を含む加筆は1917年執筆の清書原稿カイエVIIIへ添付された紙片(パプロール)の、破れて失われた部分にあったものであろうと推測する⁷⁾。即ち、アルベルチーナに対する《nid d'alcyon》という語は、1917年に現れたということである。1917年頃ブルーストがアルベルチーナの部屋着に関する加筆を行っていたことと無関係とは考え難いものがある。

第一タイプ原稿に見られる《comme un doux nid d'alcyon》という記述は、《comme un doux》までタイプされ、《nid d'alcyon》が手書きで書き加えられている。オペラ座でのゲルマント大公妃の描写《la douceur d'un nid d'alcyon》に呼応するかたちで書かれたと考えれば、《doux》に続く語として、清書原稿の段階ですでに《nid d'alcyon》が着想されていた可能性がある。清書原稿タイプの際、《nid d'alcyon》の部分が読み取れず空白にしてあったとすれば、ブルーストがその空白へ再度《nid d'alcyon》と手書きで挿入したものであろう。

ブルーストが清書原稿の段階でこの部分をブランクにしておき、清書原稿のタイプ後に《nid d'alcyon》という着想を得たという可能性も指摘されよう。しかし、ゲルマント大公妃とアルベルチーナの対称が意識されていれば、又、清書原稿執筆当時の1917年に、アルベルチーナの部屋着に関する執筆が行われたことを考え合わせれば、部屋着の模様の鳥を示唆する語《nid d'alcyon》がすでに清書原稿の段階で現れていたという可能性は高い。

第6篇「逃げ去る女」中のアルベルチーナに関する記述、「死んだ恋人の名を呼び続ける小鳥のように」(IV, p.16)は、1917年の清書原稿カイエXII(NAF16719)の余白の加筆であるが、次節に述べる「翡翠」の神話の一つと同じ内容であることが理解できる。

又、プレイヤッド版の註(II, p.1549)によれば、ウェルギリウスの『農耕詩』中に「翡翠はテティスのお気に入り」との記述があるという。

○月の女神

ジョン・ラスキンの『鷺の巣』の中に紹介されている、ギリシャ神話「アルキュオーネ(翡翠)」の異本(a.b.c.)⁸⁾の要約を、下記に挙げる。

- a-1. アルキュオーネとその夫は、自分達をゼウスとヘラになぞらえたためゼウスの怒りをかい、二人とも翡翠に姿を変えられた。しかしゼウスは、翡翠の抱卵期である冬至の間は、海が凪いで穏やかであるように計らった。(アポドロロス)
- a-2. アルキュオーネは、海で死んだ夫の後を追いつ入水しようとしたが、これを憐れんだ水の女神テティスが、

二人を翡翠に変身させた。(セルヴィウス)

- a-3. 風の神であるアルキュオーネの父が、翡翠の抱卵期である冬至の間は、海が凪いで穏やかであるように計らった。(オヴィディウス)
- b. 雌の翡翠は、人間だった頃愛していた夫の名前を呼び海の上を飛び続ける。(ルキアノス) (男女を入れ替えて、アルベルチーナの名を呼ぶ語り手の描写に使われる。)
- c. 雌の翡翠は、冬至ごとに雄の翡翠の亡骸を葬り、巣をつくる。(オヴィディウス)

異本 (a-1,2,3) の内容から、翡翠は「穏やかな結婚生活」の象徴とされるようになる。

異本 (c) の内容は、フレイザーの『金枝篇 (Le Rameau d'Or)』中の「女神とその夫の聖王」の關係に酷似している。聖王は、陽暦と陰暦がほぼ一致する「大年の冬至」の頃、後継者に殺され葬られる。自然死は聖王の力の衰弱と見なされるためである。聖王は、植物 (農作物) の、春の芽吹き、夏の茂り、秋の刈取り、冬至の再生の象徴でもあった⁹⁾。

プルーストが小説中で言及するケルト文化のドルイド教の司祭は、この聖王に当たる。1917年のプルーストの書簡中の「玉石混交であるラスキンの作品の中の良いものを探す」ことの喩え「森の中で黄金の枝を探す」¹⁰⁾は、『金枝篇』を示唆したものであろう。

グレイヴスは、フレイザーの説を参考に、「月の女神の配偶者である聖王は、大年の冬至の頃に死んで女神に埋葬され、この時新たな王が生まれる」と解釈している¹¹⁾。更に、「月」は、潮の満ち干への影響から「水」と、その満ち欠けから「死と再生」と関連づけられ、又、テティスは、海の支配者でもある「月の女神」の異なった名だと説明する¹²⁾。

以上から、プレイヤッド版註で『農耕詩』中で「(水の女神) テティスのお気に入り」とされる翡翠は、月の女神の寵鳥でもあり、「死と再生」の意味を持つことが理解できる。

プルーストがグレイヴスを読むことは時代的に不可能であるが、フレイザーの『金枝篇』等から、当時のヨーロッパの知識人として、翡翠と月の関係を知っていたものと思われる。

以下は、ゲルマント大公妃と「月の女神」との関連を表す記述である。オペラ座でのゲルマント大公妃は月の女神ディアナ《Diane》に喩えられる (II, p.355)。これに先立つ場面で「翡翠」の喩えが使われていることからの「月」の暗示であると考えられるが、劇場で朗読されたラシーヌの『フェードル』中のイポリットは、セネカ版では、ディアナを崇めているという事実もある¹³⁾。

劇場における貴婦人への「鳥」の喩えは、習作『楽しみと日々』の中にすでに見られ¹⁴⁾、この貴婦人の名イポリータは、ラシーヌの『フェードル』のイポリットを思わせる。

又、イポリットへのフェードルの嫉妬は、小説中では語り手のアルベルチーナへの嫉妬に喩えられる (IV, p.41-43)。

プレイヤッド版の註によれば、「語り手がアルベルチーナの死後その過去の交際相手を探る」場面の草稿で、語り手が耳にした少女の名はディアナ《Diane》である (IV, p.1014)。

眠るアルベルチーナの描写には「月光」が「翡翠の巣」と共に使われる (III, p.580) が、その寝息は「微風《douce comme un zéphir marin》」と描写される (III, p.579)。《douce comme》という表現は「翡翠の巣」を、「微風」は「風の神であるアルキュオーネの父が翡翠の抱卵期の冬至の間は海が凪ぐよう計らった。」という神話を思わせる。

「囚われの女」中で、語り手は文学者による月の色の表現の違いを、「昔は銀、[…], ヴィクトル・ユゴーは青、ボードレール、[…]は黄」等とアルベルチーナに語る (III, p.909)。一方、第三篇「ゲルマントの方」第2部への加筆中、語り手と話すシャルリュス男爵がゲルマント大公妃を絶賛する断章の中で、男爵はブローニュの森の月を、《Ah! Ce serait agréable de regarder ce "clair de lune bleu"》と言う (II, p.851)。プレイヤッド版註によれば“clair de lune bleu”はユゴーの静観詩集中の文言であるという。

この部分の清書原稿 (NAF16707) 及び 1919年の棒組み刷り (NAF16763, fol.44iv) では、最終稿の《ce “clair de lune bleu”》に相当する部分は単に《cela》である。この段階の後になっても、ゲルマント大公妃に「月」に関する加筆が行なわれたことが理解できる。

○果物（特にオレンジ）と月

ゲルマント大公妃とアルベルチーナに関する記述には、「果物（特にオレンジ）に喩えた月」が現れる。この場合の「月」は「翡翠」との関連で考えることができる。

オレンジという表現は早くから小説中に現れる。1909年の古い草稿カイエ36には、ゲルマント大公妃邸の夜会で「オレンジの木の温室《orangerie》を見たいと言う「赤い薔薇の少女（une jeune fille aux roses rouges）」が現れるが（I, p.979）、この少女はアルベルチーナの前身の一人であり、1912年まではその記述を確認できる。

又、「オレンジ」は、語り手が、貴族の名 Guermantes（ゲルマント）の [antes] という部分の音節に感じる色としても現れる（I, p.169）。

1915年、「月をオレンジに喩えた」下記の断章がカルネ2に書かれた。（Carnet 2, f° 46 r°-v°）（III, p.1353）

il avait [fait] si chaud que nous rêvions Albertine et moi des fruits [...] pour calmer notre soif et dans le ciel [...] la lune tout étroite à son dernier quartier apparaissait [...] comme la légère pelure mauve d'un fruit qu'un couteau eût commencé d'écorcer délicatement dans le ciel.

第4篇「ソドムとゴモラ」中には、この断章を元にした記述がある。1921年にはこれに呼応する記述が、小説中のこれより前の場面2カ所に加筆された。

語り手がゲルマント大公妃の夜会に行く場面には「空には月が浮かんでおり、ちょうど四半分に切ったオレンジの皮をうまく剥いたように」（III, p.34）、夜会の庭の場面には「空に潤いを与えている月、[...]、皮を剥いたみずみずしい果物のようなあの月」（III, p.46）、又、夜会の後アルベルチーナが語り手に電話をして訪ねて来た場面には「オレンジをしばって水でわったジュース」（III, p.136）等の表現が見られる。

つけ加えれば、「翡翠」を表す《martin pêcheur》が、ゲルマント大公妃の死去後に大公の後妻となり「大公妃」という称号を分かち持つヴェルデュラン夫人の所蔵の皿の記述に（IV, p.289）、「果物に喩えた月」がカンブルメール一族の別荘の記述に（III, p.354）、それぞれ使われており、ゲルマント大公妃とアルベルチーナの対称性を弱めているかのような事実はある。

以上は、アルベルチーナの部屋着の模様の「死と再生を表す鳥」のモデルとしての「翡翠」、及び、その「月」との関連についての考察である。次に、もう一つの「鳥」のモデルと考えられる「孔雀」についての小説中での暗示を確認しておく。

1-2. 孔雀《paon》の暗示

「孔雀」という表現は、ゲルマント大公妃の描写に直接には現れないが、その描写の付近には現れる。アルベルチーナの描写には直接的にも間接的にも現れないが、アルベルチーナの部屋着の鳥には、生成過程において「孔雀」の暗示が見られる。

「孔雀」という表現は、上記「翡翠」の場合とほぼ同様に、ゲルマント大公妃とアルベルチーナ以外の登場人物達に関する記述とその付近に、特権的に使われている事実はある。

オペラ座でのゲルマント大公妃の記述中の「孔雀」という語の付近には、カンブルメール若夫人の記述がある（II, p.357）。又、いくつかのフォンテーヌの寓話以外文学には無縁のカンブルメール侯爵の記述の付近には「孔雀と懸巢」の寓話が現れる（III, p.739,740）。更に、ラスプリエール荘の持ち主カンブルメール老婦人（III, p.208）、荘の借り主ヴェルデュラン夫人（III, p.390）が、それぞれ荘の庭で孔雀に餌をやる記述があるが、「孔雀」は、これらの脇役の登場人物が象徴する「華美」「スノップ性」を暗示するものであろう。

○アルベルチーナの部屋着と「孔雀」

語り手のヴェネツィアへの思いとの関連で描かれる部屋着の生地の色は、ヴェネツィアの大運河のイメージと結びつき、ホイッスラーの絵の題名を思わせる「青と金」とされる。

サン・マルコ寺院と孔雀

1916年、アルベルチーナの部屋着の参考にするため、プルーストはフォルチュニーの親類筋マリア・ド・マドラッツ夫人に問い合わせる。

拙訳： ご存知ではないでしょうか。フォルチュニーが婦人服のモチーフとして「ヴェネツィアのサン・マルコ寺院（ドゥカレ宮殿 草稿：III, p.1791）のビザンティン風の柱頭の装飾によく見かける、水を飲む番いの鳥」を使ったことがあるかどうかを¹⁵⁾。

マドラッツ夫人からは「フォルチュニーがインスピレーションを得たのはカルパッチョの絵です。」という返事があった。しかしそれは、上記の問い合わせに続く部分「フォルチュニーがインスピレーションを受けた外套、服が描かれている絵がヴェネツィアにあるでしょうか。」に対する回答であったかもしれない。小説中では次のように使われている。

アルベルチーナの死後ようやく忘却に至った語り手がヴェネツィアで見たカルパッチョの絵「悪魔祓い」の中の人物のコートは、生前のアルベルチーナのコートと同じであり、再び彼女の思い出が蘇る。アルベルチーナのコートは、絵の中のコートを現代に生かしたフォルチュニーの作であり（IV, p.226）フォルチュニーにも再生の暗示が与えられている。

「ビザンティン期の柱頭の装飾によく見かける水を飲む番いの鳥」との問い合わせの文言は小説中でそのまま使われている。「番いの鳥」に関する回答がなかったからではないか。回答がなかったとすれば、プルーストの表現の不正確さも起因していたと考えられる。

プルーストが予約購読をしていたラスキン全集の『ヴェネツィアの石』中には「（ビザンティン期の特徴として）孔雀が復活の象徴として用いられている。」と述べられている¹⁶⁾。ラスキンが提示した「水を飲む番いの鳥」の三種類の図の一つはサン・マルコ寺院の正面壁にあり、孔雀とされる¹⁷⁾。他の二つは、大運河沿いのトルコ人商館の正面壁の装飾に酷似している。しかし、ラスキンの著書、『建築の七灯』中に示す「ドゥカレ宮殿」の柱頭の鳥の装飾も、「水を飲む番いの鳥」の装飾ではない。「中央に泉／水瓶等、左右に鳥」という装飾は、壁面には見られるが、ラスキンの著書の柱頭には確認できない。

部屋着の鳥は、「豪華な (somptueuse) 灰の中から甦って」、「サン＝マルコ寺院の天井に描かれているように、[...] 全ては戻ってくるものだから」と描写される（III, p.871）。これは、ラスキンの『サン・マルコの休息』¹⁸⁾中の寺院の円天井にキリストの像と共に円環状にラテン語で描かれた新約聖書「使徒行伝」の言葉で、復活後のキリストが昇天した空を見上げるガリラヤの人々に、天使達が語りかける言葉である。

DICITE QUID STATIS QUID I[N] ETERE CO[N]SIDERATIS FILIUS ISTE D[E]I IC (IESUS) CIVES GALILEI SUMPTUS UT A VOB[IS] ABIT [ET] SIC ARBITER ORBIS IUDICII CURA VENI[ET] DARE DEBITA IURA

拙訳： ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あの神の御子イエスは、貴方がたを離れて天に上られたが、それはこの世で為すべきことをもった存在となるためである。あの方は、この世で審判を行うために、そして、この世にあるべき正しい法を施すために、（再び）この世に来られるのである¹⁸⁾。

プルーストが使っているフランス語の形容詞《somptueuse》は、このラテン語の動詞《SUMPTUS》の音から導き出された可能性がある。ラテン語の《SUMPTUS》はフランス語の《unlevé》である。「意味は異なるが音が類似した」語をプルーストが他の文学作品等から引用している例は他にも見られる¹⁹⁾。このように、マドラッツ夫人から回答が得られなかった「鳥」の描写に、プルーストは聖書の中の言葉を修飾として使ったものと思われる。

ホイッスラーの「孔雀の間」

プルーストは、画家ホイッスラーの絵の題名を模し、海辺の少女たちに「バラ色と金のハーモニー」、バルベック湾に「ブルーとシルヴァー」、等の表現を使っている（II, p.269）。

ところで、ホイッスラーが手がけた英国の個人宅の食堂の内装は「青と金の孔雀」がテーマであった。四辺の壁は、青と金の孔雀やその羽毛を模した装飾を持つ²⁰⁾。一方の壁に掛けられたホイッスラーの「陶磁の国の姫君(ローズ色と銀のハーモニー)」は、1905年パリで開催されたホイッスラー展に出品され²¹⁾、プルーストも観ている²²⁾。

「孔雀の間」は1906年シカゴの美術蒐集家フリヤ邸に移築されており、プルーストが、その頃同邸に滞在していた友人マリー・ノードリンガーから情報を得た可能性は高い。すでに「スワン家の方へ」中に、オデットが「知人の食堂を建てた男性に、自分も食堂を作ってもらえるかどうか[….]」とスワンに言う場面がある(I, p.241)。

部屋着の「青と金」は、この食堂の壁の模様、裏地の「ローズ色」は壁の絵画(ローズ色と銀のハーモニー)、又、「部屋着」という発想は絵の中の姫君の服装が参考にされていると考えられる。プレイヤッド新版全3000ページ強の中、「囚われの女」中のある30ページ(III, p.870~900)の間には、部屋着の色の「青(bleu, azur)と金(or)」(III, p.895, 900)、裏地の色の「ローズ色(rose Tiepolo)」(III, p.896)、ヨットに積む銀器(argenterie)の「銀」(III, p.870)が集中的に現れている。

以上見てきたように、アルベルチヌの部屋着の「死と再生」を意味する「鳥」は、「翡翠」と「孔雀」を暗示すると考えられる。この暗示は更に、ゲルマント大公妃とアルベルチヌにおける「アルキュオーネ(翡翠)神話」中の「変身」にも比すべき「変身」をも暗示するに至る。

2. 変身と再生

小説中では、ゲルマント大公妃もアルベルチヌも死去するが、二人とも、ある意味において、「変身」して「再生」すると考えられる。

アルベルチヌの死後、語り手は、彼女への追憶、判明したその過去への嫉妬の後、忘却に至る。母と訪れたヴェネツィアのホテルに届いた、語り手宛の電報の差出人はアルベルチヌと読めた。しかし、それは書き癖と電報局の誤読による間違いで、差出人は幼な馴染みのジルベルトであった(IV, p.220)。又、前述のように、ヴェネツィアで語り手が見たカルパッチョの絵の中の人物のコートは、デザイナー、フォルチュニーがそれを参考にして現代風にアレンジしたアルベルチヌのコートを思い出させた(IV, p.226)。二度にわたるアルベルチヌの「変身」と「再生」と見ることができる。

第一次世界大戦及び自身の療養生活を経た後、語り手はかつて招かれその邸の豪華さと貴族の称号を持つ人々の存在に深い印象をおぼえたゲルマント大公邸のマチネに、再び招かれる。大公妃を名乗るのは、かつて「翡翠の皿」を所蔵しており、大公妃の死後大公の後妻となったブルジョワのヴェルデュラン夫人であった(IV, p.533)。ゲルマント大公妃とヴェルデュラン夫人により具現される「大公妃」の称号の「変身」と「再生」である。

一方、小説中には、ゲルマント大公妃、アルベルチヌとは異なる、作家ベルゴットの「作品に変身しての再生」が見られ、作者プルーストとの関連を思わせる。

「囚われの女」中、作家ベルゴットの死に際しては、「書店に並べられた彼の著書は、魅りの象徴のように思われた」と語られる(IV, p.533)。

ベルゴットの「作品に変身しての再生」の箇所は、1917~1922年のカイエ62中に示唆され²³⁾、1922年の第三タイプ原稿(NAF16746)に現れる(III, p.1697)。アルベルチヌへの「翡翠」の加筆が1917年頃、ゲルマント大公妃への「月」の加筆が1921~1922年である事実を考えると、「変身による再生」のテーマが、遅い時期の加筆の中に位置づけられていることは明白である。

作者の分身でもある語り手は、ラスキンをモデルの一人とする作家ベルゴットの「書物の中で約束する死後の生」なるキリスト教的な考え²⁴⁾には疑問を呈している(II, p.31)。

それは[…]私が自分自身の死や、[…], ベルゴットがその書物の中で人々に約束しているような死後の生を考えたりする時の困難さの底に潜む拒否…。(No.3, p.429)

作家を志す語り手は、小説の結末近く「永遠の持続は、作品にも人間にも約束されていないのだ (IV, p.621)。」と述べる。自分の作品の行末への不安を克服したいというブルーストの希望は、小説執筆の遅い時期に「作品への変身による再生」という比喩として実現されている。

結論

アルベルチーナの部屋着の模様の「死と再生」を意味する鳥のモデルと考えられる鳥は、「孔雀」と「翡翠」である。ブルーストは、このうち「翡翠」が象徴するものを、小説執筆の最終段階で加筆している。これは作家としての自分の作品の将来への不安から来たものであろう。

方法としては、恣意的に登場人物を組み合わせて見せながら、ゲルマント大公妃とアルベルチーナの組み合わせにおいては、「変身による再生」という共通項を意識している。ゲルマント大公妃に使われた「翡翠」の語をアルベルチーナの記述に加筆し、「翡翠」と縁語の「月」をその描写に使う。最終段階では、ゲルマント大公妃に「月」を使う。

「変身」、「再生」は、小説中で語り手や種々の登場人物の描写に比喩として使われている。しかし、小説中で死去し「変身による再生」が語られるのは、ゲルマント大公妃（の称号）、アルベルチーナ、ベルゴット以外にない。小説中で死去する主要人物、スワン、サン・ルーにも「変身による再生」は見られない。

上記のような「永遠の持続は約束されていないのだ」というブルーストの諦観が、「変身による再生」への希望に移行したものと考えられる。

語り手は、作家ベルゴットの「変身による再生」に、タディエの言を借りれば、「紛れ込む」。作家である語り手、即ち、ブルーストは、時間や空間という次元の外にある「作品に変身しての再生」という比喩の中で、その願いを半ば実現させたのである。

註

1. Marcel Proust 《A la Recherche du temps perdu》, Pléiade, Gallimard, 1987-1989. 引用・参照は、巻数、ページ数を括弧内に記す。マルセル・ブルースト、鈴木道彦訳、『失われた時を求めて』、集英社、1996-2001. 引用・参照は、号数、ページ数を括弧内に記す。
2. Jean-Yves Tadié 《Proust et le roman》, Gallimard, 1971, p.216.
3. ibid., p.231. 《une longue procession [...] où le narrateur se confond parfois》.
4. Etienne Brunet 《Le vocabulaire de Proust》, Champion, 1983, p.45.
5. ゲルト. ハインツ＝モーア『西洋シンボル事典』、野村太郎他訳、八坂書房、2003, p.80, & p.140.
6. ロバート・グレイヴス、高杉一郎訳、『ギリシア神話（上）』、紀伊国屋書店、1969, p.144.
7. Alison Winton 《Proust's Additions》, II, Cambridge University Press, 1977, p.146.
8. John Ruskin 《Eagle's Nest》, The works of Ruskin, Library edition, XXII, G. Allen, 1906, p.249-253.
9. サー ジェイムズ・G・フレイザー『金枝篇』、内田昭一郎他訳、東京書籍、2003, pp.161-180.
10. Correspondence, XVI, p.38. Jacques Hébertot 宛, 1917.1.31 付.
11. ロバート・グレイヴス、高杉一郎訳、『ギリシア神話（上）』、紀伊国屋書店、1969, p.10.
12. 同, p.49.
13. ルキウス・セネカ『セネカ悲劇集（1）』、小林標他訳、京都大学学術出版会、2004, p.328.
14. Marcel Proust 《Les Plaisirs et les jours》, Gallimard, 1971, p.42.
15. Correspondance, Plon, XV, 1987, p.49. Maria de Madrazo 宛, 1916. 2.6 付.
16. ジョン・ラスキン『ヴェネツィアの石』、福田晴虔訳、2、中央公論美術出版、1994、p.143.
17. Otto Demus 《The Church of San Marco in Venice》, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Trustees for Harvard University, 1960, p.147. Wolfgang Wolters 《Die Skulpturen von San Marco in Venedig》, Deutscher Kunstverlag, 1979, Kat.75.
18. John Ruskin 《St. Mark's Rest》, The works of Ruskin, Library edition, XXIV, G. Allen, 1906, p.292.
19. 意味は異なるが音が類似している語 (cours) を小説中に使っている例。
Proust《A la Recherche du Temps Perdu》: Ces amis qui [...] au pied de l'glise, devant le port et sous les arbres du cours (遊歩道). (IV, p.567) ; Flaubert 《Un coeur simple》: Ils se rencontraient au fond des cours (中庭), derrière un mur, sous un arbre isolé. <http://>

perso.orange.fr/jb.guinet/pages/coeur.html

20. Linda Merrill 《The Peacock Room》, Yale University Press,1998, p.31.
21. <http://www.asia.si.edu/exhibitions/online/peacock/default.htm>. Dr. Patricia de Montfort, Exhibition Culture in London Project, Centre for Whistler, University of Glasgow (e-mail to Hiroko Kikuchi, 2004) . 展覧会出品カタログ番号 9.
22. ジャン=イヴ・タディエ、吉川一義訳『評伝ブルースト下』、筑摩書房、2001, p.105.
23. Kazuyoshi Yoshikawa “Etude sur la Genèse de la Prisonnière d’après des Brouillons Inédits, II: Transcription de Brouillons”, Université de Paris-Sorbonne, 1976, p.333. Pléiade III, p.1697 脚註1 : Ce fragment figure aujourd’hui dans le Reliquat de la Bibliothèque nationale.
24. 以下は、この部分を書いた時にブルーストの念頭にあったと思われるラスキンの『アミアンの聖書』（ジョン・ラスキン、岩崎力訳、『ブルースト全集14』、筑摩書房、1986,p.48-50）の中の一節である。「貴方が、[...]人々を愛しながら、[...]、審判者が全てを正しいものにするであろう日 [...], 再び彼らと目を合わせ、手を握りしめたいと望むのであれば、[...]、永遠の愛の平和の中を歩むであろう時の約束、[...]、いつの日か《われらが主》とその王国になるであろうことが私たちに約束されているのである。」

(2007年1月12日受理)